

現代短歌分類辭典

第三十二卷

津端 修編纂

津 端 修 編 纂

現 代 短 歌 分 類 辞 典

第 三 十 二 卷

現代短歌分類辞典

32

昭和四十七年八月十日発行

定価五五〇円

著者
兼印刷者
発行

津 端 修

〒
164

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津 端 修

端

修

電話 振替 東京 六七三四一
三八七局八四二九番

凡例

- 一、明治、大正、昭和三代に詠まれた歌三十七万八千首を分類した。
- 一、分類の基準は単語を中心とし、単語には、ことごとく品詞名をつけた。
- 一、単語の排配は、五十音順に従つた。
- 一、序文集は第十二巻にある。
- 一、歌は原作の仮名遣いにしたがい、初版本に拠る方針をとつた。
- 一、歌の下にある記号は歌集名の略符号である。
- 一、単語の説明は、新仮名遣いに従つた。

あまりーて
 余り苗
 あまりに
 あまりにーし
 余りーにーしかーば
 余りにも
 余りーぬ
 あまりーぬるーかな
 あまりーぬれーば
 あまりの
 あまり水
 あまりもの
 余り湯
 あまりりす

目

一 二 三 一 五 一 三 一 五 歌数

次（第三十二卷）

頁数	余りゐーし	あまり居り
一	余る（終止形）	余る（連体形）
四	余るーかも	余るーなり
五	余るーべし	余るーらし
三	余るーらし	あまるーらむ
ク	余るーらし	あまるーらん
ク	あまるーらむ	あまれ
四	あまるーらん	あまれ
二	あまれ	編まーれーずーもがな

一 一 二 一 一 三 四 一 三 三 一 一 歌数

ク ク ク 犀 ク ク ク 兵 ハ 爪 犀 ク ク 三 頁数

編まーれーたりーけむ
 編まーれーたる
 余れーど
 あまれーども
 余れーば
 余れーり
 余れーる
 あまれーれーば
 天少女
 海人少女
 蟹少女子
 海人少女たち
 蟹少女ども
 あまをとめら
 蟹をのこ
 尼叔母
 蟹小舟

三 → ニ → ニ → 一 五 ニ → 五 三 六 → 一 → 一

アマモフネ貝	蟹をみな	編まーん	甘んじーたりーし	甘んじーて	あまんざる	網浴み	編みあがる	編み上げーし	浴みーあそぶ	編み糸	網面	アミエルの日記
天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天

一 → 一 → ニ → 一 一 四 五 三〇 一 九 一 → 一 → 一

クククク空クク空空ク空ク空ククク充空

網かかり鴨	編みかけ
網がこひ鶴	編笠
網笠岳	網笠
あみがさ百合	あみかね一つ
あみき一つ	編み一き
あみくれーし	網ぐち
浴み一けむ	網倉
浴み一ける	網越し
浴みこみーし	網越しこもる

一一一六一ニ一一一一二一一

七	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	八
網小舎	編みさし	浴ざざりし	浴みさす	網	編	浴	編	浴	編	浴	編	浴	編	浴	九
網すべく	浴み一ず	浴す	網状	網島	網し	浴	編み一し	浴	編み一し	浴	編み一し	浴	編み一し	浴	十
					て	みし	みし	みし	みし	みし	みし	みし	みし		
						か一ば	か一ど	か一ば	か一ど	か一ば	か一ど	か一ば	か一ど		
						けり									

一一一一一一一一三四一一一六

ククク三ククククク二クククク七

網すーらむ
 浴みせ
 浴みせ
 浴みせくる
 あみせーたてまつる
 浴みせ居り
 網染釜
 浴みそめーし
 阿弥陀
 阿弥陀堂
 阿弥陀が峯
 阿弥陀が獄
 阿弥陀経
 阿弥陀組み
 あみ竹
 阿弥陀堂

五一一四七一ニ一一一一一一

101

阿弥陀寺
 あみー佇てーり
 網棚
 阿弥陀に
 阿弥陀如来
 阿弥陀の御仏
 阿弥陀仏(あみだぶ)
 阿弥陀仏(あみだぶつ)
 阿弥陀ほとけ
 阿弥陀仏鼻
 阿弥陀仏鼻
 あみたまふ
 編みためーて
 編みーたり
 浴みーたり
 あみーたる
 溶みーたる

ニー一三ーーーーー五ー一ー三三三ーー

〃〃一〇〃〃〃〃元々々々元々元々元

網戸越	網床	網灯籠	網戸	同	網綱	浴み一 つ	編み一 つ	あみづけゐる一 なり	網地島
									あみ一つ
									編みつぐ
									網づくろひ
									糖蝦漬(あみづけ)

一一二五三七五一一四三七一一三一一

網船	編引き	あみ針	アミバ	網の目状	網の目	あみの浦わ	あみぬ	浴みぬ	浴みにしきり	浴みにけむ	浴みにき	浴みながら

五一一一一六一一四二二六一一三六二

三	ク	ク	ク	三	ク	ク	ク	三	ク	ク	ク	三
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

あみ棒	網雪灯
編みしましーし	浴みーむ
網目	浴みよ
編物	浴みよ
浴み居る	編みゐーて
浴みゐる	浴みゐーて
同	編み居る(連体形)
あみ居る	(終止形)
浴みゐる(終止形)	浴みゐーて
同	編み居る(連体形)
浴みをはり	(終止形)
浴み終へーし	
浴みをへーて	

四一一一二一ニ一ニ一一九四一一一

三	三	三	三	三	三	三	三	三
浴み居り	浴みをり	浴みをり	浴みをれーば	浴みをれーば	浴みをれーば	浴みをれーば	浴みをれーば	浴みをれーば
同	同	同	同	同	同	同	同	同
アムウル								
アムステルダム								
浴む								
同	同	同	同	同	同	同	同	同
（連体形）								
浴みーん								

四二一一七三三四六四一一五一一一五四

三	三	三	三	三	三	三	三	三
---	---	---	---	---	---	---	---	---

アムゼル 編む一なり
アムブル あむ一なる
アムブル あむ一べく
アムメル川 あむ一べし
アムメル湖 あむ一や
アムニア あむ一や
アムール あむ一らし
アムール あむ一らしき
アムール あむ一らむ
アムール 沐むる
アムールの河

一 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 四

一 三 ハ ハ ハ ハ ハ 五 ハ ハ ハ ハ ハ 六 元
雨 天 飴 合計 沐 む れ 一 ば
アムンゼン

四〇五六首 六元 八〇 四 一 一
三 五 ハ ハ ハ 三

あまりーて【動詞・助詞】

朝風にかりかりとあぐる真帆の張り孕みあまりて船傾けり①

荒木暢夫

朝顔のからみあまりて垂れさがる蔓に上向きに咲く花は藍

小田切浪彦

朝なさな^も挽ぎとる胡瓜今朝もまた笊にあまりて取りこぼしつつ⑦

菊池知勇

青笹を敷きて竝ぶる鯛の尾の反のゆ^{そり}しさ籠にあまりて⑩

河野慎吾

憤り胸にあまりて眼のまへに群る人を見つめたりけり⑪

菅半作

石の辺にいくつ薄の穂はそよぎ日ざしあまりて恋しきものを⑫

北原白秋

頂をおほひあまりてなだらかに石楠群は谷にかたむく⑬

小宮良太郎

一心にひとつことのみ思ひつめ思ひあまりて散るさうびかな⑮

茅野蕭々

入ればすぐ席にあまりて寝る人の靴のうら動く頭の上に⑯

尾上柴舟

姥捨の棚田の青は山裾をめぐりあまりて野に広がれり⑰

小田観螢

大樟の力あまりて逞ましき太しき枝はゆがまへて立つ

中村三郎

あまりーて

あまりーて

かはゆさに余りてなるや故もなく君を憎むに心つかれぬ②
瓶にあまりて 燃場の板に残しきつる かの灰の屑よ心にのくる①
君が歌才に余りて見ゆれども飽き易きかな心添はねば④
君とわれかかるえにしの彩糸のあまりて誰の思つづるや③
草敷きて千総の藤を観るけふの幸は余りて眠氣催す④
雲といへば光恋しき玻璃の戸にあまりてしろく春は闌けつつ⑧
苦しさをつつみあまりて出しちまた霧のともしの影さへ暗し②
恋しさのあまりて胸のいたむころああ遠びとのなどてかへらぬ①
拒まんの力あまりてふるふ声をうひうひしとや笑みてなだむる①
様々に思ひあまりて兄君の一人はほしき秋のくれかな①
三里にも余りて黒し西日して榛名の山の押せる倒影⑯
しかはあれど思ひあまりて往きゆかばおのがゆくべき道あらむかな③

前田夕暮	西村陽吉	半田良平	金子薰園	吉野秀雄	北原白秋	森園天涙	富田碎花	石榑千亦	佐佐木信綱	與謝野寛	九條武子
------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

蓴菜を掬へば水泥掌にあまりて照り落つるなりまた沼ふかく②
渓の岩をおほひあまりてゆたかなる楓もいまだ紅葉に早きか③
中尊寺夏をひそかに杉群の匂ひあまりて樹脂したたらす

北原白秋

机うちて我とわめきつ故しらぬ憤ろしさ胸にあまりて⑤

小宮良太郎
若尾鶴子

つつみにも人はあまりて隅田がは小田のくろゆくはなざかりかな
長雨に湿る畠の不気味さも月に余りていつか馴れにし

窪田空穂
小出粲

情すぎて恋みなもろく才あまりて歌みな奇なり我をあはれめ⑤

若林牧春
與謝野寛

南天の実の粒青し師の庭におもひあまりてむなしくはるつ①
憎しみの余りてけだし殺しけむ憎しむ心われは与せず①

荒木暢夫
花田比露思

庭の木の立ち枯れ見れば、白じろと、幹にあまりて、虫むれとべり
庭の面にさ延敷きて干す糲の干しあまりてか路にまで乾す④

沢空
半田良平

橋の上に散りて香に立つ白き花のこぼれあまりて池にも浮ける⑤

あまりーて

松田常憲

あまりーて

ひと恋ふるおもひあまりて胸いたむこころをのせて夜の汽車にあり①
ふる雨に庭の諸木のぬれそぼち余りてぬらす庭先の下駄を①

細茎のむら葉まさをく盛りあがり鉢に余りて垂るる石竹①

御帳の裾いささか照す灯の光余りて及ぶ静けき群に⑫

燃ゆるもの内にこもりて形なさず論じあまりて丘をまたのぼる

雪ふかき落葉の木の間入日さしあまりてここ窓を染むるも

指尖のふとりをおぼゆ薄原二里にあまりてわが来つらむか⑦

よろこびも悲しみもわれに知りつくす歳のあまりてよぶ声のあり⑤

わか葉さすかげなつかしさにはとこのえだに余りて露ぞこぼるる

尾とかしら皿にあまりて盛られたるやまめの魚をほめつつぞ食ふ①

あまりなえ【名詞】「余り苗」

いつしかに月の光のさす畔に余り苗乞ふと友を待ち居り⑥

富田 碎花

豊島 晃

川浪 磐根

尾上 柴舟

川上 柴舟

加藤 克巳

若山 牧水

尾上 柴舟

桝 富照子

昭憲 皇太后

神原 克重

石川 秀

あまりに【副詞】

ああ無言なることも土に親むこともわれにはあまりに無しよ老タルシス⑦ 壬 善磨

赤とんぼ羽きらきらと光り散り午後の日ざしのあまりに暑き⑥ 佐佐木信綱

秋の空廓寥として影もなし あまりにさびし 鳥など飛べ① 石川啄木

秋の野にあまりに真赤な曼珠沙華その曼珠沙華取りて捨てよやれ② 北原白秋

秋の日のかけはあまりに白くして浴ぶるこの身もありと思はなくに② 岡崎義恵

秋の山あまりにさびし生きながらすだまと人のなるべうさびし① 小杉放庵

秋晴れやあまりに山の事なきに用なき峯の名もとひてみる④ 尾上柴舟

悪夢にも心あまりにおどろかず憂き旅寢にも馴れにけるかな⑬ 吉井勇

暁の窓あまりに近く迫り立つ富士に向ひて呼吸をし吐かず⑬ 尾上柴舟

朝の戸のその子あまりに口疾なりし緋桃かしこく日記いつはらぬ 與謝野晶子

あたり前のこと言ひ居るに口吃り記者の筆記のあまりにせはし⑤ 柚富照子

あまりに

あまりに

あぢきなく指に泥しぬ白百合の折れて伏すをばなげくあまりに

原田琴子

あの大地の上でおれは今まであまりにあくせくと働いてゐた⑫

土岐善磨

仰けば心怖る、眼をおとせばなほ悲しまる、あまりに雪の光れば①

尾山篤二郎

あまりにあやまりおほき答案を見し現らめて寂しくなれり④

半田良平

あまりに静かにたえし御息のゆりまつらばふと覚めたまはじや①

山川柳子

あまりにただ信ぜらることの苦しさにながす涙とはなほしも思はざりき⑬土岐善磨

木下利玄

あまりに汝が泣きさけび寝ねぬ夜をいかりし事し今はさびしも②

北原白秋

あまりに速く冷えて凍れば霰の玉しら玉のごともころげたりけり

山川柳子

あまりに日が暖く静かなればふと手習をせんと思ひつ①

土岐善磨

あまりに貧し　あまりに貧しき人々を遂に憎めり　何にも知らず

若山牧水

あまりに身近に薔薇のあるに驚きぬ机にしがみつきて読書してゐしが
あまりに御帳^{みどり}近みしづたまきいやしきわが身わがここちせぬ⑧

尾上柴舟